
不幸の売り人

芥骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸の売り人

【Nコード】

N3202B

【作者名】

芥骨

【あらすじ】

あまりの可愛さに女子一同から嫉妬された少女、八代礼奈は一年以上に渡ってイジメを受けていた。一人、とぼとぼと通学路から外れた路地を歩いていると、妙な雰囲気を持った、しかし美しい女性と出会う。

第一話：出会い

「……………」

北海道の札幌市内にある、細い、暗い路地。そこを歩く少女の名は、八代礼奈。ろくに散髪にも行っていないのであろう、前髪も後ろ髪も異常に長かった。某ホラー映画で井戸から出てくる幽霊少女を想像させる。

しかし前髪の奥にある顔立ちは、なかなかに端正なものであった。そこらに居る美容師に髪でも切らせようものなら、モデルへの道も開けるであろう。

だが礼奈はそれをしなかった。否、出来なかったというべきか。彼女は苛められていた。

理由は単純、嫉妬である。心の汚い女共の嫉妬だ。

高校に入学した時から、礼奈は浮いていた。余りにも可愛かったからだ。

綺麗な黒髪、透き通るような白い肌、小さく潤った唇、猫のように大きな瞳。

男子たちは、すぐに礼奈に目をつけた。だから、他の女子には目もくれなかった。

それにより、自分に自信を持っていた女子一同のプライドが崩れた。礼奈が新一年生となつてたつたの三日でイジメは発生した。

最初は、ゴミを投げつけたり足を掛けて転ばせたりするような軽いものだったが、

だんだんイジメはエスカレートしていく。

そして今は高校二年の三学期。

学校に行かない時期もあった。自殺を考えたこともあった。

だが彼女は強かった、負けなかった。今まで、いじめっ子たちの命令を

聞いたことはただの一度も無い。

それでも、限界というものはあった。そして礼奈はもう限界だった。トイレに入ればドアの上にある隙間から、水の入ったバケツを投げられ、

体育になってランニングをすれば、女子が揃って礼奈を転ばせる。

昼食時、礼奈の母が作ってくれた弁当を、窓から投げ捨てたりしたこともあった。

礼奈がちよつと髪をいじったり、オシャレをしたりすれば、女子一同が

それを認めなかった。

「はあ……………」

礼奈は本日で22回目の溜め息をついた。

親や教師に言ったこともあった。彼らは一応「やめなさい」といじめっ子たちに言っただけだったが、やめるのはほんの数日。

そしてその後はいつもより惨いイジメが待っている。

「あと、一年近くもこんな状態で居ろって言っの？」

誰に言うわけでもなく愚痴る礼奈。こんな路地裏で、誰も聞いてはいない。

思ったが、一人、その言葉に耳を傾けるものが居た。

「あなたを助けてあげましょうか？」

「え？」

振り向くと、黒いコートを纏った長髪の美人が居た。

雪のように白い肌は礼奈と似ていたが、雰囲気はまるで違った。

礼奈が可愛いと言われるのであれば、この女性は美しいと言われる

であろう。

「あの、あなたは……」

「イジメられてるんでしょ？」

肌以外は黒に染まった長髪の女性が、コートのポケットをまさぐりながら言う。

そして煙草とライターを取り出し、タバコを咥え、火を点けた。ふうーっと、随分美味そうにタバコを吸う女性を見つめ、礼奈は言った。

「あの、どうしてそれを？」

「まあ、ちょっとしたアレよアレ。それよりあんたもやる？」

女性は煙草を一本、礼奈の眼前に差し出す。

「いえ、遠慮します」

礼奈は強く、はっきりと言った。

「なんであなた、そんなに強い瞳をして、強い意志も持ってるのにイジめられてるわけ？」

女性は心底、不思議そうに言った。

「よくわかりません……ただ、可愛いから調子に乗ってるとは結構言われます。ああ、可愛いって罪なのね……」

「助けてやろうかと思ったけど、やめたわ」

女性は立ち去ろうとした。

普通に考えて、こんな怪しい得体の知れない女と一緒に居たいとは、

同性は思わないだろう。しかし、礼奈はこの女性になにか、魅力を感じた。

何故だか期待してしまった。この人なら、助けてくれる、と。

「待ってください！ 出来れば、助けていただけませんか？ 出来る限りの

お礼はします！」

藁にもすがる思いである礼奈は叫んだ。

女性はやーっと笑い、振り向いて一言。

「私の名前は佐々木幸子。よろしくね、八代礼奈ちゃん」

第二話：証明

八代礼奈は、佐々木幸子と名乗る女性に連れて行かれ、小さめのアパートでコーヒーを啜っていた。

常識的に考えて、初めて会ったばかりの人間に付いて行って、しかも部屋の中に入ったりするはずは無いだろうが、礼奈は正に、藁にもすがる思いだ。形振り構っていられないし、このままイジメが続くようならば、どうなってしまうても構わないと考えている。

部屋の中には、既に一人の男性が居た。茶髪に染めて、男にしては長い髪。それに眼鏡を掛けている。パツと見オタクだ。だが、パソコンを凝視しつつ、キーボードをもの凄いスピードで叩き、

時折「フヒヒ」と笑う。その様は、どう見てもオタクだった。

「まあ、一応紹介するね。この気持ち悪いのは斉藤雄二。これでも探偵兼ハッカーなんだよ」

「へえ」

礼奈はボケーンとしながら空返事をする。

未だに、今自分に置かれている状況を正確に認識していないのだ。

「あの、あたし、どうしてここに連れてこられたんですか？」

礼奈の問いに、幸子は何を今更といった感じで

「だから、あんたを助けてあげるんだってば。いじめっ子たちをゴシカアンと

言わせたいんでしょ？」

「まあ、一応そうなんですけど、その……どうやって?」
「超能力」

ぶほっ！ と、いい歳してコーヒーを吐き出す礼奈。

真顔で超能力、などと言われたのがツボだったらしい。

それに驚いた幸子は、吸っていた煙草の煙を思いつ切り吐き出した。

「げほっ、げほ………うわ、汚いなあ。それにひどい。

私、ホントに超能力使えるんだからね?」

「あはははっ、すいません。でも、超能力って、それは………あははははは!」

テーブルをティッシュで拭きながら爆笑する礼奈。

そんな彼女を見て腹を立てたのか、幸子は立ち上がって言った。

「証明してあげるわ、着いてきなさい」

二人が向かった先は、商店街。

幸子は一つの店で酒とタバコを購入し、くじ引きを引くことになった。

ぐるぐる回して、球を一つ出すタイプのくじだ。

一等は金色の球で、賞品はのクロノグラフ機能付きの腕時計。

普通には買えば数万から数十万はするであろう、ブランド物。

そして幸子はそれを当ててみせる、と礼奈に言った。

「あれですか? あんな凄いの当たるわけないじゃないですか」

「まあ、見てなさい」

幸子はぐるぐると、回転式のくじ引き機を回し始める。

コロコロと球が出てくる。礼奈はやっぱり外れた、と思った。五等の、黄色の球だと思った。ただのボールペンが当たったと思った。

しかし、店員は少し間を置いて叫んだ。「一等賞!」、と。周りに居た客がどつと沸く。

幸子は涼しげに笑って、賞品を受け取る。

そしてそれを箱から取り出し、腕にはめてみると、周りの客から拍手が起こった。

高貴な腕時計に、幸子の高貴な顔立ちがとても合っていたからだ。幸子は隣に居る礼奈に呟く。

「どう? 信じる気になった?」

「……………ええ、まあ」

礼奈は啞然としていた。まさか予言通り当てるとは思わなかった。だが、何故だか心の中の、ほんの一隅では当てると思っていた。彼女は、佐々木幸子はどこか一般人とは違うオーラを纏っている。礼奈は最初会った時からそう思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3202b/>

不幸の売り人

2010年11月11日07時19分発行